うちの庭は広いもので。

世界の景色に魅せられて

Ken Ohki / 大木賢

はじめに

うちの庭は広いもので、まだまだ知らない風景が無限にあります。渡り鳥が何ヶ月もかけて移動をするような地球の裏側はもちろん、昆虫が一日に移動できるような小さな世界の中にさえ驚きの光景があるのです。これまで自分が目の当たりにしてきたのは、そんな膨大な数のひとつまみにも満たない、僅かなわずかな瞬間です。しかし、その僅かな瞬間の中にも心動かされる光景というのは数え切れないほどあって、すべてを鮮明に思い出すことなど到底できたものではありません。ましてや、自分以外の誰かに伝えることなど不可能に近いのです。こんな時、自分の見た景色がそのまま相手に伝わればいいのにと思うのですが、写真がその手助けをしてくれます。もちろん、写真にも限界はあって、残念ながら自分の見たもの、感じたものの全てを伝えることはできません。しかし、少なくとも一枚の写真が持っている情報量というのは千字の言葉よりも遥かに多いはずなのです。だから、写真という道具を使って自分の見たものを皆さんと共有しているのです。

さて、僕はこれまで日本のほかでは 15 の国と地域、100 以上の町を訪れたのですが、中には好きなところもあればそうでないところもありました。口コミやそこから生まれるステレオタイプというのは、必ずしも自分の感じたものと一致しているとは限りません。知らないところが好きかどうかは行ってみなければ分からないのです。旅の途中で聞いた町を訪ねてみたり、無計画で途中下車をしてみたり、ということもありました。そうやって旅をしていると、思いがけないところで美しい景色に出会えることもあります。聞いたことのないような小さな町に魅力を感じることも少なくありません。この本は、そうやって見つけた本当に好きな町だけを集めた写真集で、有名な大都市から小さな地方都市まで 25 都市を掲載しています。どれも自信を持っておすすめできる町です。この本を見て「行ってみたい」と思ってもらえたのならそれだけで嬉しく思います。それでは、早速うちの庭へご案内しましょう。

サラマンカ

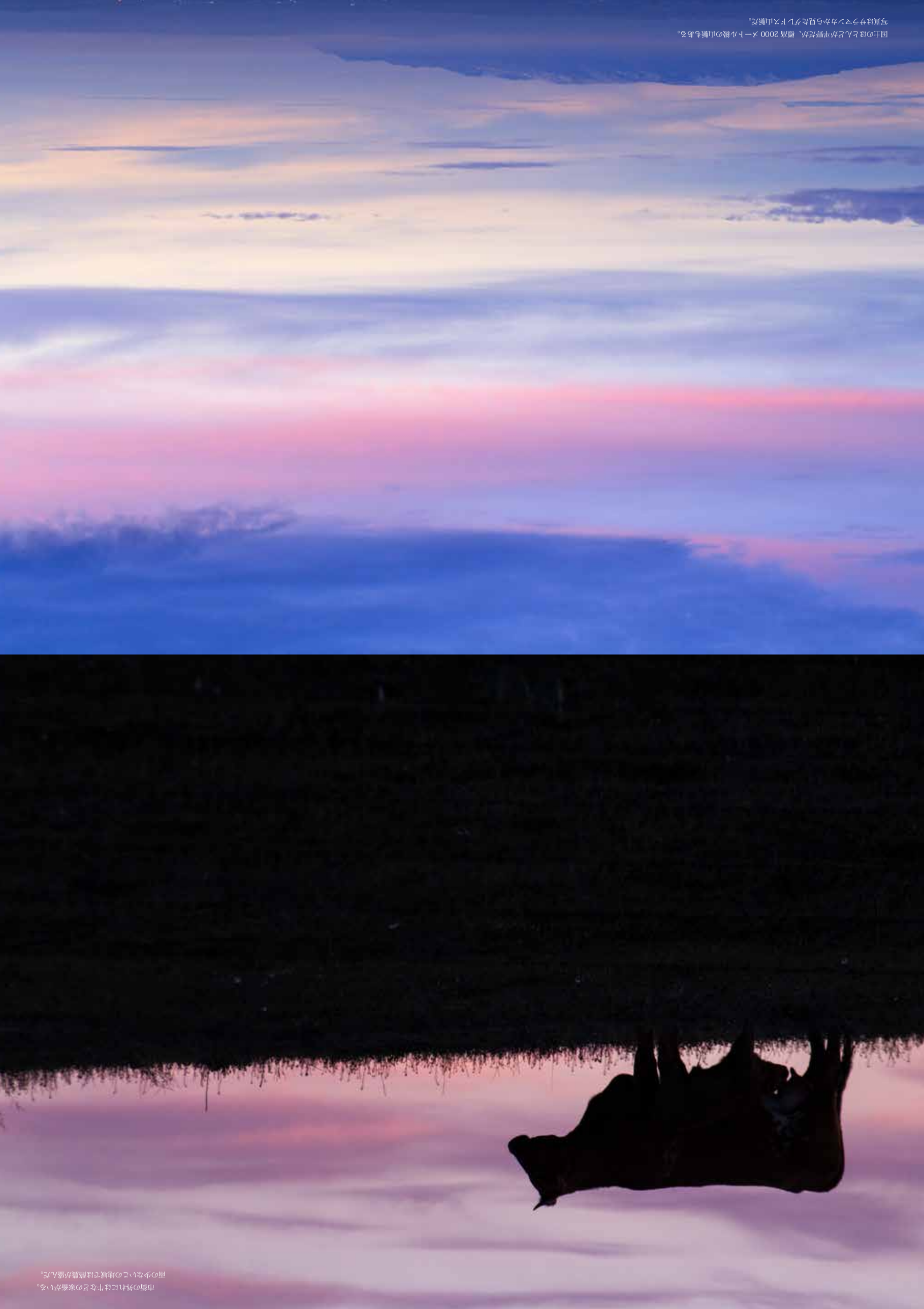
Salamanca

スペイン中部、カスティージャ・イ・レオン州にある地方都市で学問の町としても知られます。ここにはイタリアのボローニャ大学などと並んで世界最古の大学と考えられているサラマンカ大学があります。あのクリストファー・コロンブスもこの地で天文学や航海術を学び、後にアメリカ大陸を「発見」したのです。そんなサラマンカには今でも世界中から学生が集まります。実はスペイン語にも方言はあって、一般的に知られているスペイン語は「カステジャーノ」と呼ばれ、首都マドリードやサラマンカなどの地域で話されます。南のアンダルシア地方へ行くと訛りが強くなり、ガリシア地方ではガリシア語、カタルーニャ地方ではカタルーニャ語、バスク地方ではバスク語などスペイン語とは全く違う言葉も話されています。そういう点でも標準的なスペイン語を学ぶ地としてサラマンカは人気があるのです。そして自分も約一年間、サラマンカ大学でヨーロッパの諸問題を学んだのでした。

サラマンカは比較的乾燥した地域で、一年の大半は青空が見えます。北陸出身の人間としては、これほど気持ちのいい毎日はありません。小さな町ながら、必要な物は何でも揃います。物価は安く、食事も美味しい。生活には何ひとつ不自由なく、日本にいる時よりずっと快適でした。そして、町の旧市街は世界遺産に登録されていて、僕が住んでいたのも大昔の建物の中。町の中心はいつも大勢の人で賑わっていて、窓を開けるとストリートライブのジャズ音楽や民族音楽が聞こえてきます。音楽が鳴ると人が集まり、人が集まると自然と踊りだします。まさに絵に描いたような「ヨーロッパ」が目の前にあり、日本との違いに驚くばかりの毎日を過ごしたのでした。

サラマンカには新旧二つの大聖堂があり、
ミサのある日にはパイプオルガンの音色が響き渡る。

街の中心には「プラサ・マジョール」という広場があり、
スペインで最も美しい広場と称される。



国土のほとんどが平野だが、標高 2000 メートル級の山脈もある。
写真はサラマンカから見たクレドス山脈だ。

由街の外れには牛など の家畜がいる。
雨の少ない この地域では酪農が盛んだ。

ローテンブルク
オプ・デア・タウバー

Rothenburg ob der Tauber

一年中クリスマスの街として日本人からの人気も高いのがドイツにあるローテンブルク・オプ・デア・タウバー。冬のドイツといえばクリスマスマーケット。休暇を利用して訪れたのですが、イメージ通りの世界に到着するなり大興奮したのを覚えています。ドイツではアドベント（11月30日に最も近い日曜日）の始まりとともにクリスマスが始まり、全国各地でクリスマスマーケットが開かれます。アドベントとはキリストの再臨を待ち望む期間で、日本語では待降節とも言います。アドベントに入ると4本のろうそくを用意し、第一アドベントには1本目、翌週には2本目と順番にろうそくを灯していく習慣があります。それぞれ「希望」「平和」「喜び」「愛」の意味があり、4本すべてに灯りをともしたままクリスマスを迎えます。子どもたちはアドベントカレンダーを楽しみにします。これは25日までの日付の箱がついたカレンダーで、その日の箱を開けるとお菓子などが入っています。そんな習慣のあるドイツは言うまでもなく西方教会の影響力が大きい国で、今でもキリスト教とは切っても切れない関係にあります。だからこそ、これほどクリスマス関連の行事が盛大に行われるのです。

さて、そんなドイツのなかでもとくに「クリスマス感」が強いのがこの町で、木組みの可愛らしい家が旧市街いっぱいに並びます。そして「クリスマス博物館」やクリスマス専門店もあり、まさに町全体がクリスマス。この旅はクリスマスの数日前に思いついたのですが、すでに宿は満室状態。なんとか旧市街の外れにあるペンションを確保できました。それほど人気の町で、クリスマスマーケットも大賑わい。屋台のグリューワインや特大のソーセージは最高に美味しかったですよ。

ポルト

Porto

ポルトはいい。この一言で説明が足りるくらい、ポルトは魅力的な街でした。ポルトガル北部、大航海時代に発展し、この港から世界中にワインが運ばれました。そのワインの名はポートワイン。世界的にも評価の高いことは、ワイン好きの方ならご存知かと思います。ポルトガルはワインはもちろん、料理もお菓子も何を食べても美味しい美食の国です。ポルトガルでは朝食はパンやクッキーで軽く済ませることが多いのですが、街にはパステラリア（カフェ）が多く、朝食に甘いタルトを食べる人も珍しくありません。大航海時代に砂糖が手に入った影響か、とにかく甘党の印象があるポルトガルの人たち。でも、たしかにポルトガルのお菓子は絶品で、気持ちが分かります。お気に入りはチーズタルトの「ケイジャーダ」とエッグタルトの「パステル・デ・ナタ」。これと濃いめのコーヒーの相性は最高に良くて、一息つきたい時に食べたくなってしまいます。

大西洋に面しているポルトガルでは漁業も盛んです。なかでもイワシが有名で、イワシのトマト煮とポートワインの相性は抜群。一番のお気に入りは「フランセジーニャ」と呼ばれる料理で、パンにハムやチョリソー、チーズなど豪快に挟んでその上に半熟の目玉焼きをトッピング。最後にトマトベースの濃厚なソースをかけて、山盛りのフライドポテトと一緒にいただきます。これぞＢ級グルメ。ボリューム感のある断面は衝撃的ですが、ビールと一緒にいただくともう虜になってしまいます。

また食べ物の話ばかりになってしまいましたが、ポルトはカラフルで可愛らしい街並みも魅力的です。街をぐるっと回るだけなら一日もあれば十分ですが、ポルトには長く滞在して街の隅々、メニュー表の上から下までを知りたいものです。

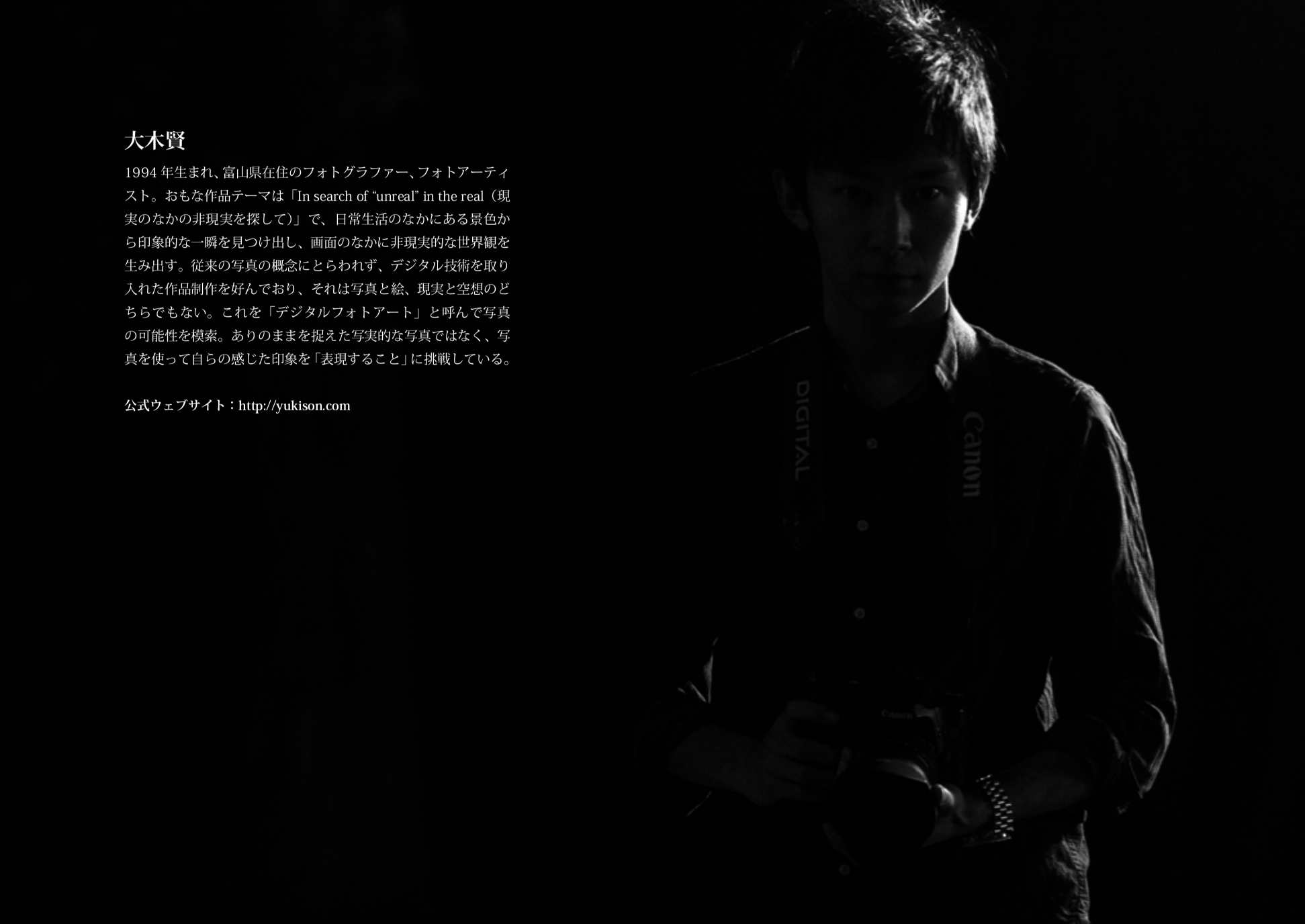
ヴェローナ

Verona

「ああ、ロミオ、ロミオ、どうしてあなたはロミオなの。」それは青い月の夜、ジュリエットがバルコニーの上で言った言葉でした。ところで、そのバルコニーはどこにあったのか。それがここ、イタリアのヴェローナです。ヴェローナはイタリア北部、ヴェネツィアとミラノの中間にあり、ローマ帝国時代につくられた円形劇場（アレーナ）をはじめとする歴史的建造物が数多く点在する町です。そんなヴェローナはシェイクスピアの戯曲「ロミオとジュリエット」の舞台として知られ、ジュリエットの家も一般に公開されています。ここには世界中からカップルがやってくるのですが、中には独り身の人や恋の悩みを抱えている人もいますよね。でも、ジュリエットはそんな人の相談にも乗ってくれます。ジュリエット宛てに手紙を出すと、ジュリエットの秘書（ジュリエット・クラブという団体の方々）が一通一通、丁寧に返事をしてくれるのです。お悩みの方はぜひジュリエットに相談してみてくださいね。

ロミオとジュリエットは悲劇に終わりましたが、ヴェローナの街は明るくロマンチックな雰囲気。とくに丘の上から見る夜景にはうっとりしてしまいます。かつては剣闘士による闘いが繰り広げられたアレーナも、今では野外オペラの会場に。毎年夏の夜になるとアレーナ・ディ・ヴェローナ音楽祭が開催され、『アイーダ』や『カルメン』を中心とする作品が上演されます。そしてヴェローナといえばニョッキで、ニョッキ祭りも開催されます。これはむかし、神父が飢えに苦しむ人々にニョッキを与えたことに由来し、二月のカーニバルでは教会の前でニョッキがふるまわれます。様々なエピソードのある町、ヴェローナ。三度目の街歩きをする日もそう遠くないかも。

大木賢

1994 年生まれ、富山県在住のフォトグラファー、フォトアーティスト。おもな作品テーマは「In search of “unreal” in the real（現実のなかの非現実を探して）」で、日常生活のなかにある景色から印象的な一瞬を見つけ出し、画面のなかに非現実的な世界観を生み出す。従来の写真の概念にとらわれず、デジタル技術を取り入れた作品制作を好んでおり、それは写真と絵、現実と空想のどちらでもない。これを「デジタルフォトアート」と呼んで写真の可能性を模索。ありのままを捉えた写実的な写真ではなく、写真を使って自らの感じた印象を「表現すること」に挑戦している。

公式ウェブサイト：http://yukison.com